

自然主義に基づく減災行動モデルの展望

藤見俊夫

京都大学防災研究所

fujimi.toshio.7x@kyoto-u.ac.jp

災害対策の必要性を頭では理解しているが実際の行動に移さないという意図・行動ギャップの問題が広く知られている。既存の意思決定モデルの多くは、自己（意識）が信念や選好など志向的概念によって意思決定するという合理主義を前提としており、意識に上らない要因は無視されるかランダム項として処理される。この枠組みでは、意図・行動ギャップは原理的に説明できない。他方、近年では神経科学の発展に伴い、神経メカニズムや進化適応などから意思決定をモデル化する自然主義のアプローチが注目を集めている。そこで有望視されている予測誤差最小化モデルは、合理主義モデルでは扱えない意図・行動ギャップを含む、広義の身体性認知を上手く説明できることを示す。さらに、その予測誤差最小化モデルが自由エネルギー原理の特殊ケースであることを紹介し、減災行動モデルにおける自由エネルギー原理の適用可能性について展望する。

キーワード：自然主義，身体性認知，減災行動，予測誤差最小化，自由エネルギー原理